

くごの星るふは情愛

著 実秀崎屋

社論評界世

くとの星るふは情愛

社 論 評 界 世

昭和二十一年九月五日 第一刷印刷
昭和二十一年九月十日 第一刷發行
昭和二十四年三月十五日 第十二刷發行
愛情はふる星のごとく
定價百六拾圓

著 者 尾 崎 秀 實

發行者 小 森 田 一 記

印刷者 山 田 一 雄

發行所

東京都千代田區神田
東編田町一金井ビル

株式會社 世界評論社

電話考場町(66)四九七一番
振替東京一九五〇五二番

配給元

東京都千代田區
神田濱路二ノ九

日本出版配給株式會社

株式會社大化堂印刷・製本

夜明の近きを信じつゝ

——序にかへて——

尾崎 英子

一九四一年（昭和十六年）十月十五日の朝、尾崎は檢舉されました。そして一九四四年（昭和十九年）十一月七日、四十三年六ヶ月の生涯を悲劇的に閉ぢました。

檢舉されて三週間ほど経た十一月七日に、發信の許可を得てはじめての手紙を書きました。丁度それから三年目の十一月七日、「——僕も勇を鼓して更に寒氣と闘ふつもりです」と葉書を書きました。これが最後でした。この葉書を書いてから間もなく、尾崎は絞首臺にのぼつたのでした。この三年の間に、尾崎は私と楊子にあてて二百餘通の手紙を書いてゐます。

▲つじ信をき近の明夜

はじめの手紙は、檢舉されて丁度一ヶ月ほどたつて家に届きました。それから凡そ十日

に一度の割合で手紙は來ました。私は朝、眼が覚めるときつと尾崎の手紙の來る日を考へます。「まだ來たばかりだから、四五日來ないでせう」と淋しがつたり、「今日あたり來るかもしれない」とひそかな期待をもつて起きたりいたしました。來さうな日ですと、幾度も玄關のドアをおして郵便受をのぞいてみるのでした。檢閲で不許可となつて豫定の日に手紙が來なくてがっかりさせられることもしばしばございました。豫審の調べが終り、接見禁止が解除せられてからは、手紙は數日毎に届くやうになり、拘留所の規則で許される最大限度まで尾崎は手紙を書いたやうです。これらの手紙の大部分は封緘葉書で、それにペン字で細々と認められてゐます。もと／＼尾崎はパーカーの太いペン先で、行間も廣く大きく書くのが癖でしたが、獄中の通信はどれもこれも、書きたいことはいつばいあるのに、書くスペースはまるでないと訴へるかのやうに、細字でぎつしりと書いてございました。後に封緘葉書が容易に入手出來なくなつたとみえ、普通の葉書が届くやうになりましたが、その葉書もたいていの手紙に劣らぬほどの内容が書きこめてありました。「私がこの頃積極的に心をこめるものとはたゞ手紙だけです、一本のきかない手紙にも今の私の眞實なものがひたむきに出てゐないとすれば、それは私のくだらなさのためです」と言つて

よこしました。

一九四四年（昭和十九年）十一月七日の深夜、私は尾崎が死んだといふ報知を受けとりました。翌八日、二人の辯護士とともに遺骸を受けとり、下落合の火葬場に運び、夕方お骨となつた尾崎を祐天寺の家に抱き歸りました。二三日後に、尾崎の最後の葉書は届きました。あたかも生きてゐる人から來たかのやうに。でもそれつきり、もう一通の手紙も來なくなりました。私の前には色も何もない、まつたく空虚な時間と空間とが、味氣なくひろがつてゐる思ひでした。十数年の人生を結びついて來た私たちにとつて、時々二三分の面會の時間をのぞけば、この手紙のやりとりだけが、わたしたちの生活をつなぐ糸であつたのですが、この糸もふつつり切れてしまひました。

尾崎の獄中書簡には、自から書いてゐますやうに、一貫して一つの目的がありました。私と楊子に自分の思想を理解させ、自分の行動に共感させること——それが目的でございました。尾崎はこれまで私に對する思想教育をむしろ避けて來ました。自分の思想上の立場を、はつきり知らせさへしませんでした。いざといふときにそれが心配であると、松本慎一氏に語つたこともあつたさうでございます。十月十五日の事件は、それゆゑ私にとつ

では全くの不意討でございました。それまで歩んできた私の平穩な人生の路は、思ひがけない混亂と恐怖のうちに、突如として斷ちきられた譯でした。その混亂と恐怖の中で、尾崎の生きてきた道を通じて、今まで覗いてもみなかつた人生の廣がりと深さをさぐらうとしました。言つてみれば、闇路に迷ふ私に光となつてくれたのは、冷たい鐵扉にへだてられた尾崎からの手紙でした。

このたび、尾崎や私たちに、蔭になり日向になりして深いお心づかひをして下さつた幾人かのお友達の手によつて、この書簡集が世に送られることになりました。この手紙は、私たちの個人的な生活の範圍で語られた言葉でしかございません。そして私の性分からいつても、人びとの前に話題を提供することは、あまり好ましいことではございません。併し、尾崎が自分の命と家庭とを擧げて生きた道、それは人類の幸福と人間性の擁護とにあつたと思ひます。それゆゑ、この手紙が尾崎の生きた道を人びとに語り、人類の福祉について何ものかを人びとに訴へるならば、尾崎の生涯は、尾崎自身が望んだやうに、人びとの歩みの中になほ生きつづけていけると思ふのでございます。

私はこゝで、私達の味つてきた様々な苦難を、世に愚痴めいて訴へるのを目的とするのではございません。人類の幸福のためには、どのやうに眞剣な戦が必要であるか、そしてその苦しい戦の中にあつてこそ、美しい人間性がかへつて磨かれるものであるといふことを、尾崎の獄中の生活記録であるこの書簡集が、少しでも人びとに物語つてゐるとすれば、尾崎も書簡集の公刊に反對ではないと存じます。それが私が皆さまのお勧めに従つた理由でございます。

今、非常に大きな苦しみを通して、新しい日本が生れ出ようとしてゐます。尾崎の志が理解され、少しでもそれに役立つならば、尾崎もどんなにか喜ぶでせうと思ひます。この夜明けが近いことを信じつゝ、野蠻な暗黒の中に呑みこまれ去つた尾崎を思ふことは堪へがたいことでございます。が、尾崎の愛した多くの人びとの手で新しい日本が創造されることによつて、尾崎の願ひはすべて充たされると考へてをります。それを思へば、私の心にもほのぼのとした明るさが射してまいります。

二百餘通の手紙の中から、紙數がないため幾通かを選ぶことにしました。選擇には松本慎一氏と風間道太郎氏の御意見をうかがひました。編輯から装幀、出版まで、みな親しい

お友達の手によつてなされました。また宮本百合子さんが、お忙しいなかから文章をおよせくださいましたのも、大きなよろこびでございます。

初めの頃、手紙を親しい友達に見せますことを尾崎は知りまして、「愛情の手紙だからね」と、ちよつと躊躇の色をみせました。この書簡集が世に出たと、もし知つたなら、尾崎はきまりの悪い時にする癖、後頭部へ右手をちよつとやつて、ニコツと笑つたであらうと思ひます。

静かなる畫、この文を書きおへて、庭の青葉に眼をやれば、亡き人の面影が彷彿としてその中に浮ぶのでございます。

一九四六年六月一日

なほ、およみになる方々の便宜を考へ、ところどころ註釋をつけました。政治的な註釋は私にはできかねるので、松本愼一氏にお願ひしました。その分は末尾に一々松本と署名してあります。署名のないのが、私の註でございます。

目次

愛情はふる星のごとく

第一部	(昭和十六年十一月七日—同十二月一日)	一
第二部	(昭和十七年二月十三日—同十二月十八日)	一一
第三部	(昭和十八年一月四日—同十二月二十一日)	二四
第四部	(昭和十九年一月十三日—同十一月七日)	一四〇
遺書	……………	一六五
夜明の近きを信じつつ―序にかへて―	……………尾崎英子……………	一
尾崎の獄中書簡について……………	……………松本慎……………	一七五

第一部

昭和十六年十一月七日——同十二月一日

拜啓 今日始めて發信の許可を得、心嬉しく、かつは取いそぎ用事のみ申上候。^(註1)

おどろき、悲嘆お察し萬感胸に迫り候。御健康祈り候。

一、來春四月頃までに諸事處理し母娘が一生必要なる數箇のトランクに所持品をまとめあげるつもりで整理すること、まづ不急品、贅澤品、小生のものなどより始め、大きな道具など一切。^(註2)

その上で人を下宿させること、或ひは母娘が他の部屋借りに移る等決定すべきこと。但

し以上のこと急ぐに及ばず着々實行のこと。例へば賣る場合、

洋服上等は岩田^(註3)に相談のこと、一考。

本は巖松堂若主人^(註4)など相談いかゞ。

望遠鏡、寫眞機などおちちゃん^(註5)に相談。

郵便切手は、面會が出来るやうになつて申すべし。

女中はしばらく置いておかるべし。

一、楊子^(註6)の學校は電車の便よき、近き官公立の學校を第一志望とされよ、目黒^(註7)もわるくないが近所の噂いかゞ。

一、身邊すべて不自由なし。差入れは衣類など一ぱいの由、一月に一べん下着など取換へるだけでよろしきが、この點、差入れ屋と相談あるべし。

一、今月末より未決中毎月四十圓から五十圓位入れてもらへると好都合、いかゞ。

一、今一ぱん飢ゑてゐるのは活字なり、本の差入れ至急頼む、創元社の選集など、その他お見立てにて何にてもよし。

一、楊子よ、どんな苦しいことがあつてもいつも元氣で、お母さんのいふこと聞いて。

昭和十六年十一月七日

秀實

私は元氣で暮し居り候

註1 尾崎は昭和十六年十月十五日の早朝上目黒の自宅から檢擧された。警視廳特高課長を隊長に十數名がどかどかとなだれこみ、うむを言はさず、手錠をかけ、自動車にひきずりこんで、目黒署に連れて行つた。搜索のために残つた刑事たちはリヤカーに三ばい警物や警類を押収し

て引上げた。勤務先の満鐵の彼の部屋も捜索され、彼が主宰してゐた支那研究室の書篋も全部持つていかれた。それらの書物の全部がつひに返つてこなかつた。尾崎は目黒署に二週間ばかりゐたが、その間に拷問を受けたらしい。面會や差入れは一切許されなかつた。この書信は彼が西巢鴨の東京拘留所へ移つて初めて許された第一信である。その日附が最後の書信、死刑執行當日の書信と同様、十一月七日、ロシヤ革命の記念日であるのは、感慨深く感ぜられる（松本）。

註2 最初の手紙のこの部分はいたく英子夫人を痛心させた。「尾崎はもう一生歸つて来ないつもりなのだらうか」と彼女は私に訴へた。私は慰める言葉に窮した。確に尾崎は、後には多少樂觀的にもなつたが、彼の事件が最悪の結果になることを豫感してゐたのであつた（松本）。

註3 中野の岩田洋服店、洋服を内地で作る時は大抵この店に頼んでゐました。

註4 波多野一氏、一高時代の同級生。

註5 同盟通信社の吉田松治氏、吉田氏とは上海時代よりいつも近所に住ひ、終始お親しくしてきました。

註6 長女、一人子、當時十三歳。

註7 鄰立目黒高女のこと。

拜啓 英子も楊子も元気で暮してゐることと想像してゐます。

私も健康を保つて居ます、御安心下さい。

この前書いた手紙が不許可(註)になつたのでたよりがおくれました。一般に内からのたよりはなか／＼困難ですから御承知下さい。用事のみ書きます。

一、楊子の學校は電車の便のよい官公立の學校を第一志望で受けてみたらいいと思ひます。目黒高女もわるくはありませんが、近かすぎるので近所の噂などかへつてどうでせうか。

一、家事のいろ／＼、直接面會の出来るやうになるまで待つて下さい。勿論今後留守中英子の創意獨斷にまつこと多いでせうが。

一、差入れの心づくし、身に泌みて有難いです。すべて事足りてをります。着換へと書物を明日あたり許可を得て下ばます(差入れ屋まで)、連絡して下さい。

一、私は持つて來た金のうちから、朝パンと牛乳（二十五錢）、夜辨當（六十錢）を入れて居ります。辨當は六十錢ので十分です。夜食は今一番樂しみます。ところで其他菓子、雜品の購入、雜誌、一、二の書籍など加へると月三十五圓——四十圓位かゝります。この月末からその金額差入れて呉れませんか。

一、本に飢えてゐます。次々に何でも入れて下さい。三百頁位一日で讀んでしまひますので、一々英子が運んだのでは大へんです。差入れ屋との間に方法はないものでせうか。一人六冊までは手許に置けるのですが、その他雜誌などで一、二冊ありますから、三冊は一時に入ると思ひます。

勝手なことばかり書きましたが、何よりも願念するものは親娘の健康です。御自愛祈ります。

昭和十六年十一月十八日

實

英子殿

註1 實際は不許可になりました。十一月七日附の手紙のこと。